

岡本太郎記念館

港区南青山 6-1-19 地下鉄表参道駅より徒歩 8 分

川崎市岡本太郎美術館

川崎市多摩区枳形 7-1-5 小田急線向ヶ丘遊園より徒歩 17 分

伊藤誠三

「建築とパブリックアートのコラボレーション」の行方

前号で世田谷美術館を訪問、「建築とパブリックアートのコラボレーション」のその後について考えることになったが、気になった岡本太郎のパブリックアートのその後を訪ねた。

岡本太郎記念館は、1996 年、84 歳で亡くなるまで、すべての活動の拠点であったという氏のアトリエ兼住居で、坂倉準三氏設計の CB 造、屋根の鉄骨架構に創意がみられる。アトリエが生前のままに保存されているとはいえ、

没後 16 年を経て、創作の断片は残されているものの、「爆発だぁ！」の気迫は静まり返っていた。

「太陽の塔」は 1970 年の大阪万博での巨大モニュメントとして強く記憶に残るものである。保存が決まったものの周辺建物群の消滅で取り残されたような姿になっている。

先年、メキシコで発見された巨大絵画「明日の神話」が里帰りして修復され、井の頭線の 2 階連絡通路の壁面を飾る幅 30 m、縦 5.5m のパブリックアートとしてその場を得たことが耳に新しい。



岡本太郎美術館は川崎市生田緑地の中にある。市へ寄贈された作品群が中心であり、「自然と融合した美術館」のコンセプトで設計されたと聞かすが、展示室はすべて土で覆われ、地上にはモニュメント「母の塔」を置く広場の他、カフェテリア、展示空間へのトップライト塔が見えるのみで、冠美術館として個性的芸術家の面影を偲ぶよすがは全くない。原始の光を求めた作品が暗い空間に

とどめられ、縄文的なるものに衝撃を得た気迫がアルミサッシに囲われている。施設全体に氏への鎮魂の奥津城の雰囲気を感じた。

お土産品として「Taro の夢」という「もなか」が売られていたのには驚いた。最中の皮に唐辛子が入っているのが「Taro 風味」らしかった。了

